

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月17日現在

機関番号：32412
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22730401
 研究課題名（和文） アルヴァックスの階級論から集合的記憶論への連続性に関する研究
 研究課題名（英文） The study of connection between the class and the collective memory of M. Halbwachs
 研究代表者 横山寿世理（SUZERI YOKOYAMA）
 聖学院大学・政治経済学部・准教授
 研究者番号：00408981

研究成果の概要（和文）：

アルヴァックス『集合的記憶』『労働階級と生活水準』『記憶の社会的枠組み』の文献研究を通じて、集合的記憶論の保存の役割を学説的に明らかにした。また、そのような集合的記憶論が、実際の集合的記憶事例を分析する際の方法論となり得るのかを検証するために、原爆文学批評を集合的記憶として考察した。

研究成果の概要（英文）：

This study showed the conservation of Halbwachs' Collective Memory by reading *La mémoire collective*, *Les cadres sociaux de la mémoire*, *La classe et les niveaux de vie*. Then, this study confirmed Critiques on Atomic Bomb Literature as a Collective Memory, for purpose of testing the method.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	400,000	120,000	520,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：集合的記憶、アルヴァックス、階級、時間的枠、空間的枠

1. 研究開始当初の背景

20世紀末から、モーリス・アルヴァックス（Maurice Halbwachs）による「集合的記憶」を生かした研究が盛んになっている。時代区分を明確にしなが、一つの過去の事実を目を向ける歴史とは異なる集合的記憶は、歴史的事実の確定を行わないまま、ある特定の集団において成員に共有される過去を再構成すると理解されている。

そのため、国内で1990年代に改めて取り上げられた従軍慰安婦問題や、第二次世界大戦の記述を巡る歴史教科書問題に人々の関心が集まる中、集合的記憶が、過去を捉え直す作用として多用されている現状がある。このような社会的関心によって、アルヴァックスは、社会学においても再注目されるようになっている。

このようなアルヴァックスについての理

解が広まる中、本研究は、アルヴァックスの研究業績を改めて見直し、その集合的記憶論の起源を階級論の中に求めていた。

これまで、アルヴァックス社会学研究は、集合的記憶論を社会学の中で扱える研究なのかどうかの見極めとともに、発展してきたと言える。

アルヴァックスもその創設に影響を与えた歴史学のアナール学派が、社会史や心性史を20世紀初めに受容し、同時代に提唱された集合的記憶論も、その歴史学の転換と対照することで、その評価を確立したと考えられる。

けれども、アルヴァックスの研究は、集合的記憶に留まらない。『労働者階級と生活水準』（エンゲルによる家計理解への批判）は、労働者の生活感覚、物質的欲求の実際を、個人心理学的にではなく、社会的に描写することにあつたと思われる。これらを明らかにするであろう統計学・階級論・社会形態論についてのアルヴァックス社会学研究は、それほど厚みを持っていない（Baudelot et Establet 1994）。

つまり、アナール学派創立時期である20世紀初頭に、アルヴァックスは集合的記憶とともに階級論を展開していたことになる。

アルヴァックスの階級論を再考することが持つ意義は、二つほどあげられる。

一つ目は、戦後、フランス・日本を問わず、アルヴァックス研究が盛んになったのは、1990年代以降と考えられているが、そのアルヴァックスを社会学史上に再配置できるだろう。このような試みはすでにA.ベッカー（2003）が行っているが、彼女のアルヴァックス研究は歴史学からのものであり、G.ナメ（2002）によると階級論こそがアナール学派との分岐点となる。このナメによる指摘を再評価することができるはずである。

アルヴァックスは13にも登る社会的な著作を残したが、そのうちのわずか1著作『集合的記憶』のみが翻訳されているにすぎない。その他の著作は、記憶論に留まらず、社会形態学・統計学・階級論にわたる。これらが展開された順序から考えると、集合的記憶論は階級論よりも遅いことになる。

二つ目として、本研究は、記憶とはかけ離れたように思われるテーマである「階級」を、集合的記憶論との連続するものとして位置づける目論見をもつことがあげられる。これは、現在主義の立場よりも、フレーム論からの集合的記憶研究を行うことで達成されると思われる研究成果である。もちろんフレーム論も現在主義を否定するものではない。本研究では、そのフレームが、記憶に関する枠ではなく、むしろその基礎をなしていたと思

われる「階級論」から生じると予想した。このような予想もナメに依拠するものだが、アルヴァックスの『記憶の社会的枠』と『労働者階級と生活水準』をテキスト内在的に研究することで確かめられる、と考えた。

ナメの研究も、集合的記憶が階級論とは独立で発生したものとは捉えていない。この研究結果を重視して、階級論が集合的記憶の起源となるならば、集合心理的な集団理解としての階級論理解があり、それがあるいは現代盛んに行われている階級論研究へ何らかの認識論的な示唆を見込めるだろう。

2. 研究の目的

20世紀前半に活躍したフランス社会学者のアルヴァックスにしたがって、集団において共有される想起という作用を「集合的記憶」論として扱う研究が数多くある。その中で、本研究は、集団において共有される保存としての記憶論を明らかにするために、アルヴァックスの階級論に着目するのが、本研究の目的である。集団に共有される記憶は、想起作用ではなく、保存作用によって集団に固有の生活を明らかにすると予想するため、この研究が必要となる。

3. 研究の方法

本研究は、アルヴァックスによる階級論と集合的記憶論を、(1)社会学説研究と、(2)社会学史研究によって進めた。(1)と(2)の研究を並行して進めることで、アルヴァックス階級論と記憶論との関連が明らかになると考えた。これらの研究方法は、(1)テキスト内在的な社会学説的研究と、(2)テキスト外在的な社会学史的研究とに置き換えることができる。

このような学説・学史研究の延長上に、(3)集合的記憶に関する実証研究があると理解して、研究を進めた。この(3)については研究開始当初の関心には含まれていなかった。

(1) 社会学説的研究としての側面

アルヴァックスは多くの著作を残しているが、その中で現在容易に手に入るのは『集合的記憶』（小関藤一郎訳）のみである。そして、その『集合的記憶』の邦訳版ですらも、1997年にナメがアルヴァックスの遺稿を整理した増補版によると、ベルクソンの記憶論に関する多くの異文があることがわかっている。これらの異文は当然訳出されていない。それでも、集合的記憶の概略を知るのに、小関訳は十分な役割を果たしている。

そのため、本研究におけるテキスト内在的研究の対象を未邦訳の『労働者階級と生活水

準』『記憶の社会的枠組み』に絞った。

また、研究を進めるに当たってナメ著『アルヴァックスと社会的記憶』（2002年）を参照することにした。

(2) 社会学史的研究としての側面

学説的研究と同時的に進める研究の側面であるが、これまでアルヴァックスは、デュルケーム学派としてデュルケームに関する学説的研究の一環としてしか取り上げられなかった（田辺寿利・内藤完爾・中久郎など）。本研究では、そのアルヴァックスを、当時交流があったアナール学派との関連で理解する。必ずしもアナール学派の亜流ではなく、その独自性がマルクスやウェブレンの階級論からの影響関係の中に見いだせるというナメの指摘は参考になる。つまり、アナール学派からの分岐点を明確にすることを目指した。

したがって、歴史学との関連や、アルヴァックスの階級論との関連に着目して、集合的記憶の社会学史的研究を進める。

(3) 研究開始当初の関心ではなかったが、学説的・学説的研究の成果を問いただす上でも、実際の集合的記憶の事例にアルヴァックスの集合的記憶論が有効であるかを判断するために、原爆文学批評を集合的記憶として分析する。

原民喜「夏の花」や大田洋子「屍の街」、井伏鱒二『黒い雨』などの原爆文学を非被爆者世代が受容することが集合的記憶だと仮定した。

アルヴァックスの集合的記憶は、非当事者が当事者の記憶を再構成することも想定しているため、非被爆者世代の被爆について集合的記憶を批評として再構成することは集合的記憶そのものだと考えられる。

分析・実証方法は、集合的記憶を再構成する社会的枠（時間的枠と空間的枠）原爆文学批評から取り出すことによって集合的記憶が再構成することにある。

これまでの集合的記憶研究は必ずしもアルヴァックスの理論に依拠しているわけではなく、その意味でもこの手法をとることに意義があると考えた。

4. 研究成果

(1) 社会学説的研究

平成22年に、「アルヴァックス集合的記憶論再考」（日本社会学史学会『社会学史研究』32号）をまとめることができた。

これまで国内におけるアルヴァックスの集合的記憶論研究は、①集団論、②記憶の社会的枠論、③現在主義の観点から集合的想起の事例を多く蓄積してきた。①は集合的記憶

の成立は、その集合＝集団の成員であることの証明であるという論点、②記憶の社会的枠論は、集合的記憶が何らかのフレームによって構築されるという論点、③現在主義は集合的記憶が過去の集団の観点ではなく、現在の集団の観点から再構成されるという論点であった。その意味で、①から③は、一連の集合的記憶研究の想起を取りあげていることになる。

そこで、同論文では、そのような想起される集合的記憶に加えて、集合的記憶には集合的「保存」作用もあることを学説的に明らかにした。

同論文では、アルヴァックスが集合的記憶よりも先に階級論についての研究を行っていたことから、学説的にも学説史的にも、階級論と集合的記憶論の連続性を確かめることで、集合的な保存の作用を浮き彫りすることを模索した。つまり、集合的保存論が忘却されていたことを指摘して、その契機を階級論に求めたと論じた。

そもそもアルヴァックスは、ベルクソンの記憶論を批判的とは言え、その持続する記憶の生成論を的確に踏襲していると考えられる。ベルクソンは、持続を空間化すること（時間を空間化すること）に抗して、記憶の記録と再生の二重化によって持続の生成を論じた。これに対して、アルヴァックスはむしろ集合的記憶を空間的枠で囲うことによって、集合的記憶の保存（記録）を、想起（再生）とは区分しながら取り扱った。その結果として、ベルクソンが時間の空間化を持続＝記憶の等質化だと批判したのに対して、アルヴァックスは類似した過去を集合的記憶として捉えたと論じた。

その上で、集合的保存は労働者階級の消費生活を捉える社会的枠や記憶と関連することを示唆した。この論文は、当初の予想通りナメの先行研究に依存するところが大きかった。

同論文において、階級論と集合的記憶の学説的・学説的研究を深めていく必要性を改めて確認することができただけでなく、本研究の意義を明らかにするためにも集合的保存論と現代的な社会問題との関わりを指摘することも必要であることがわかってきた。

(2) 社会学史的研究

前述の「アルヴァックス集合的記憶論再考」には、社会学史的研究の側面も持っていたが、アルヴァックス以外の社会学説との関連には言及していないことから集合的記憶論研究史としての色彩が強い。

特に(3)の研究を進める中で、アルヴァッ

クスがアナル学派とどのような距離にあったかが重要で、この新しい歴史学（アナル学派）との関わりでアルヴァックスの意義を模索した。

ナメやベッカーが言及しているが、マルク・ブロックとアルヴァックスはお互いに批判し合う関係にあった。とかくアナル学派としてブロックもアルヴァックスも一括りにされがちである。そして、そのアナル学派は政治史から距離を取り、人びとの心性に根ざした社会史を目指した訳であり、デュルケムやアルヴァックスは人びとの集合性や統計的で科学的な手法をアナル学派へ持ち込んだと考えられている。

また近年に転じて、ピエール・ノラの『記憶の場』もフランスの国民意識を検証すべく、多くの集合的記憶を取り上げた。ここで明らかにされる集合的記憶もアルヴァックスに端を発しているが、『記憶の場』は、政治史をアナル学派に復権させようという取り組みであるとも言われる（谷川 2002）。

そうであるならば、政治的に明らかにされる事実ではなく、集団での記憶作用を取り扱い、ある意味で事実性に固執しない集合的記憶はますますその意義を失うことになる。当事者でなくとも体験者の記憶と一緒に想起したり保存したりできる集合的記憶の特徴はいつも置き去りにされていることになるのかもしれない。

本研究において、集合的記憶の社会学史的研究として、政治史と集合的記憶の関係、集合的記憶と歴史との相違には、政治的関心などの価値理念が大きく影響していることが予想できたことは一定の成果である。

(3) 集合的記憶の実証的研究

現代的な社会問題との関連でいえば、すでに集合的保存論と考えられるような研究が、特に被爆者への体験聞き取り調査の中などで指摘されている。被爆体験の世代間継承に関わる研究は集合的保存の典型的な事例であると言える。

そこで、原爆文学批評を集合的記憶と捉えることで、集団内の過去の体験が現在・未来へと継承される過程で生じる集合的保存を明らかにしようとした。

成果としては、第 59 回関東社会学会大会テーマセッション(1)戦争体験の世代間継承「(1)被爆の記憶と戦争体験の継承」(平成 23 年 6 月 18 日)で、戦争体験を継承するという共通テーマの下、「原爆文学『研究』という集合的記憶」と題した報告で概ね果たせたとと言える。この報告では、原爆を題材にして書かれた原爆文学に関する批評を、文学界における被爆の世代間継承方法として捉え、この営みを集合的記憶として説明することを

目指した。

この報告に先立ち、広島県立図書館および広島市立図書館での原爆文学批評の収集にあたった。国立国会図書館に所収されていない同人誌に掲載された批評も集められたことが、原爆文学批評の分析にも役に立った。

具体的には、原爆文学批評群が、アルヴァックス集合的記憶の「時間的枠」「空間的枠」を再構成していることを明らかにした。原爆文学の批評を扱ったのは、原爆を題材とした原爆文学が、これらを読む次世代を同一の記憶を共有する者として原爆文学界に巻き込んでいく様子を示すためであった。アルヴァックスの時間概念と空間概念とが、単純な時間的継起と場所とを表すものでないことから、75 本中半数以上の原爆文学批評に共通する「時間的枠」「空間的枠」に相当する観念を取り出すことになった。

これらの原爆文学批評群は、研究のノート「原爆文学『批評』という集合的記憶」(『聖学院大学論叢』25 卷 2 号)に整理した。

「時間的枠」は批評群の中で展開された原爆文学は記録なのか、文学なのかという論点のことである。時間に関する枠であるが、アルヴァックスの言う時間が単なる時刻ではなく、繰り返されるリズムや時間のスピードであると考えられる。記録／文学の論点は、特に『黒い雨』の登場によって、原爆文学は記録から文学へと昇華していくという時間的展開＝時間的枠として再構成されていることがわかる。

「空間的枠」も、単なる物質的な場所ではなく、空間のイメージである。法的権利や経済市場などもこれにあたる。そうであるならば、原爆文学をどう批評するかをめぐって展開する言語空間も空間的枠であるだろう。被爆の悲惨は体験した者にしかわからないという「体験主義」を、各批評がどのように評しているかが、その空間的枠を構成していくことになる。

また、これらの二枠は、記録／文学から体験主義との距離として転化する。つまり、時間的枠が体験主義という空間的枠として保存される。すなわちベルクソンが言うところの時間の空間化を実現していると考えられる。

このようにして、原爆文学批評という集合的記憶を実証する可能性が明らかになった。

今後の課題は 3 つあり、これらの課題は関連し合っていると思われる。1 つ目は、「原爆被害」という蓄積のあるテーマを集合的記憶として選んだことで、既存の「原爆の記憶」研究との差違と集合的記憶論の意義とを明

確にすることにある。次に、集合的記憶の方法論かが明確になっていないことが多いの研究を進める上で大きな困難となっているようなので、学説史を細かく洗い出し、集合的記憶かが登場した背景(アナル学派と集合的記憶の違い)を明確にする必要かが残されている。この2つ目の課題は、本研究申請時の目的からさらに発展した課題となる。最後に、アルヴァックスの集合的記憶論を肯定的に継承した研究としてポール・リクルの存在が重要であるように思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 横山寿世理、アルヴァックスの集合的記憶論再考——想起・忘却・保存——、社会学史研究、査読有、32号、2010、pp.75-89
- ② 横山寿世理、〈研究ノート〉原爆文学「批評」という集合的記憶、聖学院大学論叢、vol.25、No.2、2013、pp.119-127
http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reports/modules/xoonips/detail.php?item_id=4407

[学会発表] (計1件)

- ① 横山寿世理、原爆文学「研究」という集合的記憶、第59回関東社会学会大会、2011年6月18日、明治大学

[その他]

書評

- ① 横山寿世理、〈書評〉菊谷和宏著『「社会」の誕生——トクヴィル、デュルケーム、ベルクソンの社会思想史』、日仏社会学年報、23巻、2013、pp.69-73

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横山寿世理 (SUZERI YOKOYAMA)
聖学院大学・政治経済学部・准教授
研究者番号：00408981

研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし